

まちづくりの勉強会（第2クール後半、第12回～第16回）開催報告

1. 目的

高山の未来のために、どのような都市(まち)づくりを目指すのか。

市民と行政とがともに考え、議論を重ね、さらには研究する場として、多様な視点や新しい価値観を大切にした『まちづくりの勉強会』を開催し、都市づくりに関する知識の向上や将来の高山を担う人材の発掘、育成などを図る。

また、『まちづくりの勉強会』の活動の中で出された有用な意見等については、都市マスタープランなど各種まちづくり計画の見直しに活かしていく。

2. 題目

高山の未来のための都市(まち)づくり

～30年後（2050年）の高山、何を目指して生きるんや～

3. 開催日等

第12回	7月31日(水)	高山市役所（行政委員会室）	参加者 18名
第13回	8月28日(水)	高山市役所（行政委員会室）	参加者 16名
第14回	10月28日(月)	高山市役所（行政委員会室）	参加者 17名
第15回	11月27日(水)	高山市役所（201・202会議室）	参加者 29名
第16回	1月29日(水)	高山市役所（201・202会議室）	参加者 26名

4. 参加者属性

第12回～第16回までののべ参加人数 106名

1回あたり平均人数 21名

実参加者（1回以上参加） 61名

実参加人数の内訳 10代：1名、20代：6名、30代：14名、40代：21名
50代：14名、60代：5名、70代：0名

5. 各回の進め方

第12回 グループワーク（2グループ）

ふたつの表情を持った高山について、実際に若者にとって、それらは魅力的なものなのか、魅力的に変化させる方法は無いかということを中心に議論。

【**討議の視点**】

グループ1：ふたつの表情を持った高山（まちなかと郊外）

グループ2：ふたつの表情を持った高山（駅西と駅東）

第13回 グループワーク（3グループ）

30年後の高山市の姿についての最悪の仮説を克服するための旗を立て、高山市はまず何をすべきかということを中心に議論。

最悪の仮説

グループA：市街地

昔は「飛騨高山」として名を馳せていたが、古い町並は観光客の姿もまばらで、商店街はシャッター街となっている。

グループB：集落

郊外の集落では住む人がほとんどいなくなり、空き家ばかりとなって田畑や山林は荒れ放題。

グループC：仕事

高校を卒業した若者は高山市を離れ、Uターンする者は少ない。また、田舎暮らしに夢を抱き都市部から移住したものの、高山市には、仕事も抱いていた魅力も無く、失望してしまう。

第14回 グループワーク（2グループ）

30年後の高山市の姿についての最悪の仮説を克服するため、高山市はまず何をすべきかということテーマに、前回の内容を具体的な提案として深く掘り下げるよう議論。（テーマは「市街地」と「集落」）

第15回 グループワーク（2グループ）

（テーマは前回と同じ）

第16回 高山市都市基本計画の見直しについて意見交換（まとめ）

6. 特徴的な発言、キーワード

○ふたつの表情を持った高山（まちなかと郊外、駅西と駅東）

- ・高山市はこうありたいという旗を立てる。
- ・地場産業＝伝統を守るために必要な要素（木、土、機械、職人）が無い。
- ・伝統は皆で意識して作っていくものである。
- ・美しい飛騨の里山の景観を守るためには、地場産業（農業や林業）をしっかりと継続し、それに従事する人を確保するなどの取組みをしていくことが大切である。
- ・郊外だからこそ情報産業が必要。すべての産業に情報産業を絡め、強くする。
- ・観光と暮らしが両立する場所にする。回遊性を高めることが大切。

○市街地 ～最悪の仮説（古い町並は観光客の姿もまばら、商店街はシャッター街）を克服するために～

- ・高山らしさを残すため、地元の人がゆるく集まって楽しめる「高山ゼミ」をやる。
- ・たまり場を意識的に作る。

○集落 ～最悪の仮説（郊外の集落は空き家ばかりとなって田畑や山林は荒れ放題）を克服するために～

- ・30年後、子ども、孫の代まで健康に生きていられるために、「食の安全、農業の安全」を宣言する。
- ・都市部には無い地域資源（山、綺麗な水、空気、肥えた土）の良さを認識し、地域住民が意識改革をする。
- ・住む人が減っていくと、集落の田園風景、地域の行事、地図にない地名など消えていくものがあるため、記録が必要である。

7. 勉強会の様子

